参考資料

令和６年３月

王子動物園のリニューアルに関する有識者意見について

１．概　要

王子動物園のリニューアルにあたり、専門的な見地から有識者の意見等をこれまでに数回聴取してきており、「王子公園再整備基本計画【王子動物園】」に関して、下記のとおり意見をいただいた。

２．有識者への意見聴取内容

（１）動物収集計画（コレクションプラン）
（２）ゾーニングの考え方及び計画
（３）動物科学資料館の活用方法
（４）基本計画に記載すべき事項・計画内容の確認

３．有識者からの意見の概要

〇赤澤 宏樹　委員（兵庫県立大学　自然・環境科学研究所教授）

・コレクションプランの分類は、希少性も重要だが、調査研究や保全活動など何の目的で何を伝えるためなのか明確にすべき。
・大学との連携は何かしら考えられる。地域活性の面からも期待したい。
・動物科学資料館の職員は専門的だが、ある意味守備範囲は広い。大学とも連携しながら、自分で学ぶ機会、創意工夫する機会を作れるように。
・基本計画を進めていくためには、これらの方向性をお互いにつなぐ仕組みが重要。運営形態や体制づくりの中でよく検討すべき。
・新技術システムを構築することで出入場が今まで以上にフレキシブルにできる。
・新技術のモビリティは高低差解消には有効だが、障がいのある人には使えない人も多い。ユニバーサルデザインにはサポートできるソフトも必要。

〇金子 美香子　委員（井の頭自然文化園長）

・コレクションプランにおける新規導入を考える際は、フィールド研究のための展示や、野生保護なども理由として考えられる。
・感染症対策、鳥インフルエンザに関する考えについて書いておくべき。
・鳥類は、鳥インフルエンザに備えて、防疫のため隔離施設が必要で、飼育が難しい状況になっている。

・動物に不安が残らないようにスポーツ施設等の騒音対策など十分に調整しておくべき。
・暑熱対策は今後ますます重要になってくる。具体的に表現しておくべき。

○坂本 英房　委員（京都市動物園長）
・コレクションプランにおける新規導入は、教育的価値や調査研究など、何のために導入するかを明確にすれば希少種にこだわらなくてもよいと思う。
・高病原性鳥インフルエンザの流行も夏の数か月を除きほぼ通年となってきている状況もあり、飼育が難しくなってきている。
・動物種にもよるが、ふれあい前後の唾液中のストレスホルモンを調べてみると、有意に上昇していたことがあり、ふれあいによってストレスがかかっていたことがわかった。ただし、ふれあう馴致をすることでストレスを低減できる可能性はある。
・直接触るプログラムでなくても動物と環境について考えるきっかけにできるプログラムを取り組んでいる。
・基本計画を進めていくためには、“誰”が“誰”と“何をする”を明確にすることが重要であり、できることからやっていくべき。
・研究を推進するにあたり、専任の研究者を新たに確保するのか、現体制で進めるのか、体制について検討が必要。

○佐渡友 陽一　委員（帝京科学大学　アニマルサイエンス学科准教授）
・コレクションプランにおける新規導入を考える際は、フィールド研究のための展示や、野生保護なども理由として考えられる。
・動物種が減ることについては、限りある資源の中での運営でもあり、今後はより一層、動物福祉に力を入れていく必要もあるため、残った動物種に相当の力をかけていくという考え方もできるのでは。
・地域の自然保護団体などとの連携においては、県内の関連施設との関係づくりを進められると具体的なイメージがつく。
・繁殖を目的としたバックヤードも十分に確保しておくべき。また、高齢化したら繁殖活動が止まるので展示だけになりがちだが、その点も留意しておくべき。
・環境教育は知識の植え付けではなく、「行動変容」が目的。教育が支援の心につながり、動物園事業に支援してもらえることを狙っていくべき。
・施設整備する際に環境に配慮していくことを明確にアピールし、環境教育の場としてもＰＲできるように。

○坂東 元　委員（旭川市旭山動物園長）

・保護動物をストックするのであれば、十分な施設が必要。
・動物が人とふれあうことを目的とした動物種の選定は、コンセプトが重要であり、種類はシンプルにしてもよい。
・日本エリアがゲートに近いが、鳥インフルが発生した場合のことは想定しておくべき。
・動物園自体を登録博物館にする流れがある。予算の確保や、教育的な要素等を主張できることになる等のメリットがある。
・人材育成については、どう育成していくのか具体性やオリジナリティ性のある表現にすべき。

○松本 朱実　委員（社会構想大学院大学 特任教授）

・コレクションプランにおける希少種は、何のために導入するかを明確にするべきであって、目的もなく野生動物を捕獲することはおかしい、ということもある。
・調整種を譲渡していくのであれば、どこにいくのか、どうなっていくのかも伝え、市民に安心していただくような情報発信もしていくべき。
・動物とのふれあう機会については、全国的にも見直す機会となっている。教育の目標を考えて、方法論はその目標に対応させて考える。科学的に動物福祉や学びの評価をしていくことが重要。
・動物科学資料館は、剥製などを活用するだけではなく、保存することが動物の種を守る意味合いが大きく、博物館施設としては重要な役割。全国の園館ネットワークを駆使して、王子が先駆的に働きかけてほしい。
・人材育成について、飼育力だけではなく伝える技術やプログラムのデザイン力等の育成にも力をいれるべき。

４．有識者意見名簿（敬称略・五十音順）

委　員	分　類	現　職
赤澤　宏樹	造園学・ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟﾃﾞｻﾞｲﾝ	兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授
金子　美香子	動物園関係者	井の頭自然文化園長
坂本　英房	動物園関係者	京都市動物園長
佐渡友　陽一	動物園学	帝京科学大学アニマルサイエンス学科准教授
坂東　元	動物園関係者	旭川市旭山動物園長
松本　朱実	教育学・学芸員	社会構想大学院大学 特任教授